

「かゆいところに手が届く！」

～ 『1日1講 文学』の活用について ～

・はじめに

学習指導要領改訂に伴い、2022年度から高校2年生以降の現代文領域は「論理国語」と「文学国語」の選択制となりました。

近年の大学入試において文学的文章が受験科目として課される機会が減少していることもあり、この改訂は『文学国語』は不要である」との認識を生みかねないという批判もありますが、我々は「文学国語」での学びの機会を大切にしたいと考えています。

小説・随筆・詩などを読むことは、人物の心情や情景、表現の工夫を読み味わうことであり、想像力や感性を養うことができます。論理的文章の読解では得られない学力の養成に特化できるという点では、この改訂は理想的であると言えるでしょう。そのため、本校の文系を選択した生徒は「論理国語」「文学国語」どちらも履修しています。

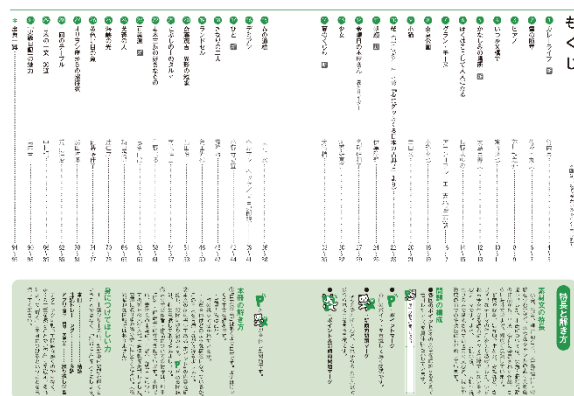
「文学国語」の授業では、生徒の柔軟な発想と着眼をもとに幅広い解釈を受け入れつつ、読みを深める活動を実践しています。何を根拠として読み取るかで解釈が広がるという面白さに触れる活動や、作品内で用いられる表現技法の意図を探る活動は、生徒も関心を持って取り組んでいる印象です。

一方、文学的文章が依然として受験科目となりうる現状においては、正確に読み取った上で問題に答えるという学力もまた、養成していく必要があります。上記のような授業展開だけでは、その

ような学力養成が叶わず、もどかしさを感じていました。



目次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	

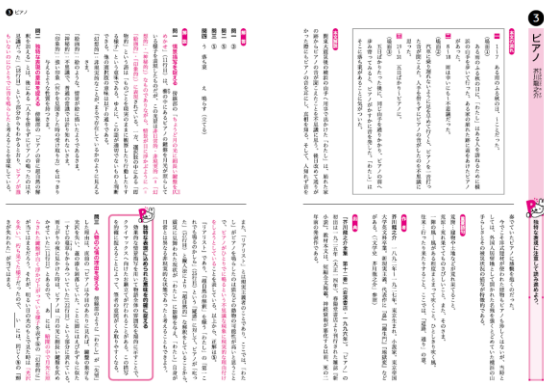


所で活用するに至ったのが本教材でした。授業の冒頭で本教材を使用し、制限時間内で文学的文章の読み取りを実践することで入試対策とし、そこからは教科書の文章を読み味わうことへ存分に時間を費やしました。『1日1講 文学』はまさに、「かゆいところに手が届く」教材でした。

・具体的実践方法

令和5年度と令和6年度の2年間、高校2年生履修の「文学国語」にて使用しています。

授業の最初の時間を使って、1題につき大体10～20分の制限時間が設定されていますが、普段はそれより約3分短縮させた時間設定で取り組んでいます。各自が問題を解き終わった後は、付属の解答解説を読み(図1)、自分の解答を振り返ります。



(図1)

ここまで取り組むと、大体15～20分経過しています。本校は45分授業であるため、残った25～30分で教科書を使用した文学的文章読解をおこないます。

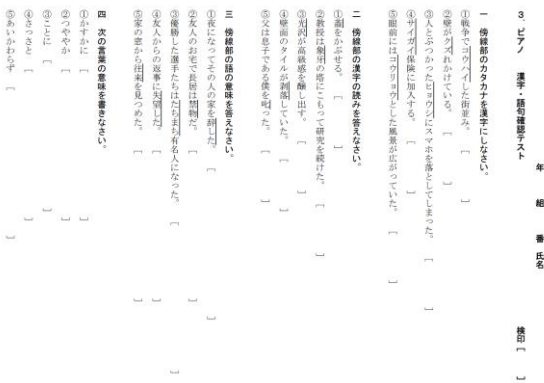
本教材を取り入れることで、メリハリのある授業が展開できていると実感しています。生徒たちは授業冒頭から集中して参加しており、積極的に本教材に取り組んでいます。これは、生徒たちが受験を見据えた文学的文章の読解に必要性を感じているからだと思います。定期試験では初見の文章を応用問題として課していますが、そこでの得点率が高いのも本教材の活用の成果だと考えています。

授業前半の本教材を活用した取り組みがあるからこそ、後半の教科書読解では臆することなく自分の意見を発言してくれていると思います。生徒たちは「それぞれのねらいがはっきりしていて取り組みやすい」、「目的別に棲み分けがきちんとしてきているので良い」など話してくれました。

また、授業内での取り組みを明確に分けることが、集中力の維持に繋がっているようにも感じます。テンポよく授業内容が移り変わっていくので、気持ちの切り替えもしやすいのだと思います。

・おわりに

以上のように、本教材を効果的に活用することで、入試対策と文学鑑賞の両面を併せ持った授業が展開できると感じています。生徒たちの間では功利主義・効率主義が浸透し、大学受験で使わない科目は不要だと考える生徒が増えると、「文学離れ」はより進んでしまうような気がしています。ただ、実利だけが全てではありませんし、無



(図2)

終わり次第、別途配布した付属しているデータの漢字・語句の問題プリント(図2)を解く作業に移行します。こちらは解答をPDFで配布し、生徒は手元にあるスマートデバイスを利用して確認します。スマートデバイスを活用し、ことわざや四字熟語の意味・なりたちを確認しても良いこととしています。

ここまでが一連の流れであり、日々のルーティーンです。授業が始まると同時に、生徒は指示をしなくとも手元に置いてある『1日1講 文学』を開き、問題を解き始めます。

駄と思える行為の中にも大切なことはたくさん含まれていると考えています。文学を読み味わうことで豊かな感性を育てていきたいです。私も生徒とともに学び、その時代において最適な学びとは何かを追求していきたいと考えています。

・プロフィール

菅谷祐太（すがやゆうた）

國學院大學久我山中学高等学校 国語科教諭

2022年度から着任し3年目。現在は高校2年生の担任と野球部顧問を担当。若さを生かし、生徒の目線に立った指導を心がけている。そのおかげか、文化祭では保護者から高校2年生と間違えられた。若く思われる分には問題ございません。